

# 万吉だより

MA GECHI NEWS

第30号 令和2年(2020)年3月

## 瓦研究の視座

館長 時枝 務

今回の特別展で取り上げる瓦は、一見地味な存在であるが、考古学の方法を駆使して研究すると、実にさまざまなことをあきらかにできる興味深い遺物である。

瓦の研究は、明治時代には関野貞ら建築史家がおこなうのが普通だったが、やがて石田茂作や内藤政恒ら考古学者が関わるようになる。建築史家にとってはあくまでも建築部材としての関心が強く、建築と密着した存在から脱却できなかつたが、考古学者は瓦そのものに関心を抱き、独自の研究方法を開拓することになった。

最初は、軒瓦の文様に関心が集中し、どこの瓦とどこの瓦がよく似た文様かということが主題であった。いわゆる同文関係の解明である。そして、その文様が朝鮮半島のどの国のものに似ているかを突き止め、高句麗系・百済系・新羅系というように故地を冠した文様系統を論じた。初期寺院を研究する際には、魅力的な視点ではあるが、似ているか似ていないかの判断は、どうしても恣意的になりがちであった。

やがて、軒瓦の製作技法に関する知見が深まり、範型に着目する研究方法が現れた。範型は、おもに軒瓦の型であり、木製のものが多い。そこに粘土を押し付けて、瓦当面を作り出すわけであるが、型押しゆえに大量生産が可能になる。大量に生産すると、どうしても徐々に木目があらわになり、ついには範傷や範割れが生じることになり、最後は廃棄される。無傷のものは最初の頃の痕跡で古く、範傷が出た頃はそれより新しく、顕著な範傷や範割れは最後の頃の姿を映し出す。このように、範型に注目することで、瓦の製作時期の前後関係は容易に推測できる。この関係を同範関係と呼ぶ。

同じ寺院で同範関係があるのは当然のことであるが、これが異なる寺院間で確認できることがあり、いくつかの可能性が浮上する。第一に同じ工房から供給されたこと、第二に工人が範型をもって移動したこと、第三に範型だけが移動したこと、などなど。そのうちどれが妥当な説か、製作技法や工人の癖、いわゆる同工品の可能性など、ありとあらゆる情報を総動員して考察が進められることになる。そこまでいくと、一枚の瓦から考察するだけでは解決できない問題が山積みするが、その謎解きの楽しさはひと一倍である。

瓦研究は、早くから寺院研究と結びつき、法隆寺再建非再建論争でも、大きな手がかりとして注目された。しかし、当時は文様の古さだけが強調され、正しい評価ができなかつた。石田茂作によって若草伽藍の焼けた瓦が大量に発掘されて、はじめて瓦の年代がわかったのであるが、法隆寺西院伽藍の瓦はどこか古風な様式を採用していたのである。その古風さに、当代一流の学者先生も見事にだまされたのである。瓦は、文様だけでなく、製作技法を含めて、総合的に研究する必要があるといえよう。

NEWS

第14回特別展「中国古代瓦とアジアの梵音具」のお知らせ

令和2年3月2日(月)から3月30日(月)まで、特別展を開催しています。

平成27年に著名な書道家であった仙場右羊氏から、中国の古代瓦を中心とした文物を寄贈していただきました。仙場氏は、中国との国交が回復した昭和40年代以降40回以上にわたって訪中され、古い書体で表現された漢字を文様とする古瓦を蒐集されてこられました。200点以上のコレクションには、訪中の記念に購入した青銅器等の模造品も含まれています。

立正大学博物館の中核をなす所蔵品の一つに、撫石庵コレクションがあります。これは、眞鍋孝志(元日本古鐘研究会会長)が長年にわたって蒐集されてきた梵鐘を中心としたコレクションです。日本の梵鐘をはじめとして、中国・朝鮮・タイ・ベトナム・ミャンマーなど世界各国の鐘、鉦鼓、銅鼓、小金銅仏などがあり、眞鍋氏により、平成12年・13年に立正大学学園に寄贈され、平成14年博物館開館により博物館に移管されました。

今回、二つのコレクションの一部を熊谷キャンパスの立正大学博物館で紹介します。

【主な展示品】

◇仙場右羊コレクションから

- 饗發紋半瓦当(燕:紀元前1100年頃～紀元前222年)
- 樹紋半瓦当(齊:紀元前1046年頃～紀元前386年)
- 双鹿紋円瓦当(秦:紀元前778年～紀元前206年)
- 「千秋萬歳」紋円瓦当(漢:紀元前206年～220年)

◇撫石庵コレクションから

- 伝樞原市出土鐘(日本:奈良～平安前期)
- 中国鐘(甬鐘)(中国:春秋戦国時代以降)
- 金鼓(高麗:「貞祐陸(1218)年」銘)
- 鐘(タイ)
- 半鐘(日本:江戸時代 寛延元年)



饗發紋半瓦当・燕



樹鳥馬紋半瓦当・齊



双鹿紋円瓦当・秦



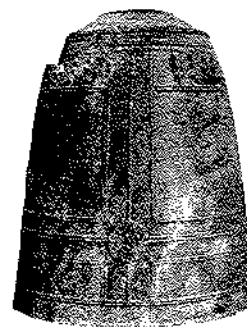
雲紋円瓦当・秦



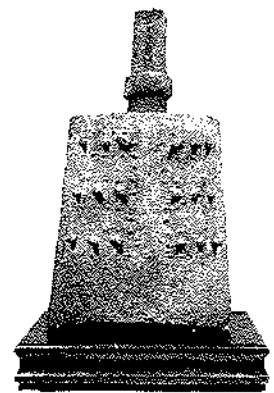
「千秋萬歳」紋円瓦当・漢



「朝神之宮」紋円瓦当・漢



伝樞原市出土鐘

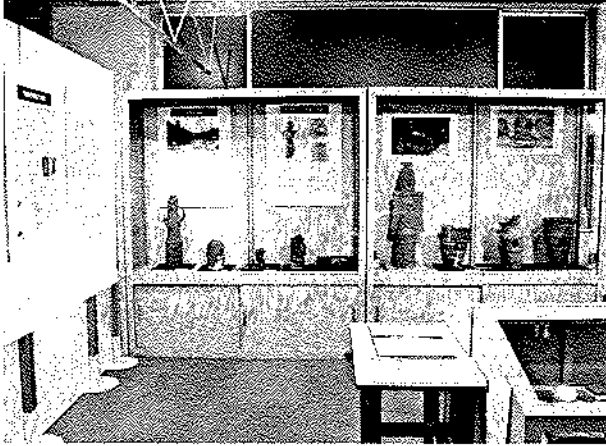


中国鐘(甬鐘)

【撫石庵とは?】

眞鍋氏によって名付けられた「撫石庵」の「石」は鐘の別称である「青石」からとったもので、「鐘をこよなく愛する庵の主人」という意味が込められています。

## 第 14 回企画展関連事業報告



### 第14回企画展 記念講演会

令和元年12月7日（土）午後1時より、記念講演会を開催しました。

会場は、熊谷キャンパス ゲートプラザ（1号館）1202教室で、参加者は25名、博物館運営委員会・梅澤啓一委員も参加されました。

講演の内容は、新井端氏（熊谷市教育委員会）による「江南地域の埴輪と埴輪窯」、山崎武氏（鴻巣市文化センター）による「生出塚埴輪窯跡の生産と広域供給」、大谷徹氏（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）による「東国における埴輪と埴輪窯」についてお話いただきました。

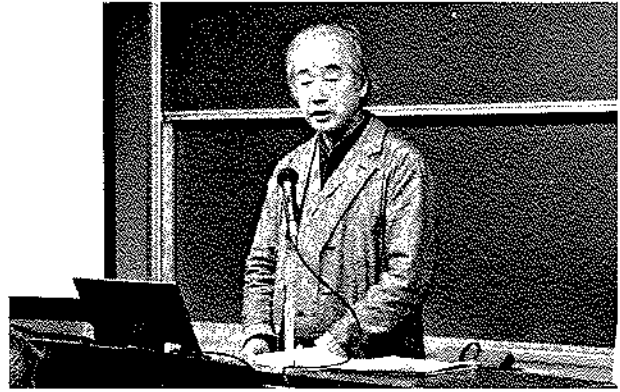
#### ◆「江南地域の埴輪と埴輪窯」

熊谷市江南地区には姥ヶ沢埴輪窯跡、権現坂埴輪窯跡というふたつの埴輪窯が知られています。新井氏は、長年にわたって熊谷市及び旧江南村の埋蔵文化財の発掘調査に携わり、このふたつの窯跡の調査手がけています。

調査当時の貴重な写真や出土品を示しながら、窯跡の構造や出土した埴輪が立てられた古墳についてわかりやすく解説していただきました。

#### ◆「生出塚埴輪窯跡の生産と広域供給」

鴻巣市の生出塚埴輪窯跡は、東国最大級の埴輪生産遺跡として知られています。元鴻巣市教育委員会職員として発掘調査にあたった山崎氏は、生



新井氏の講演の様子



山崎氏の講演の様子

出塚埴輪窯跡から出土した埴輪がどこの古墳に立てられ、どのように運ばれたかを論じていただきました。千葉県市原市や東京都港区など遠く東京湾沿岸の古墳に立てられた埴輪は、荒川などの河川を利用して運ばれたと考えられています。

#### ◆「東国における埴輪と埴輪窯」について

大谷氏は、埼玉県内の発掘調査に携わりながら、長年にわたって古墳・埴輪の研究を続けてこられました。

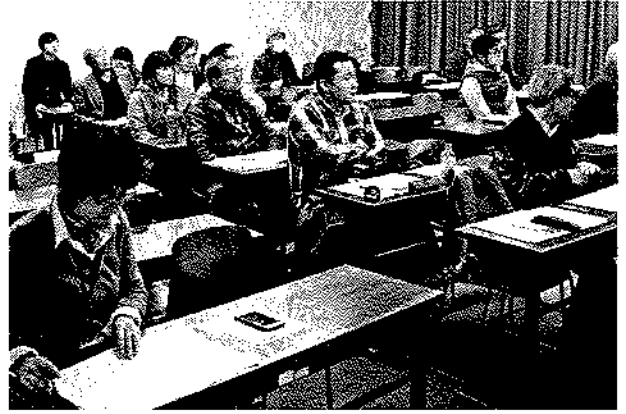
埴輪の成立・変遷から始まり、全国的な視野で埴輪の生産体制等を解説され、東国で確認されている埴輪窯跡と古墳出土の資料を示しながら、埴輪の同工品論や胎土分析など最新の研究成果を論じていただきました。

参加者の方々は、熱心に耳を傾けられていました。その後のミニ討論会では、会場からいくつもの質問や意見があり、活発な議論となりました。

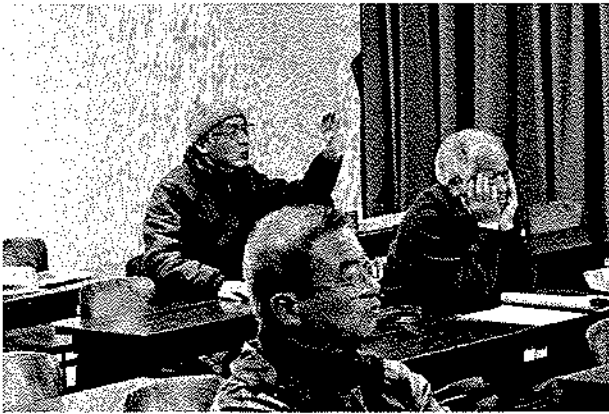
講演会終了後は、博物館の開館時間を17時まで延長したので、参加者の多くの方々が展示を参観されました。



大谷氏の講演の様子



参加者の様子



参加者による発言の様子



ミニ討論会の様子

講演会アンケートには、15名の方が回答してくださいました。

参加者の年代は、10代から20代が2名と少ないほかは、ほぼ全年代の方が4～6名となっています。参加者のお住まいは、埼玉県が10名・67%と最も多く、地域の方々が多かったことがわかりました。

講演会の情報は、企画展のポスター、チラシによるものが最も多く、今後もポスター、チラシによる広報の必要性を感じました。

講演会の内容については、「わかりやすく、理解できた」9名、64%と最も多かったのですが、内容がやや難しかったと答えた方もいらっしゃいました。

アンケート結果は、今後の事業に生かしたいと思います。

講演会では、東松山市教育委員会の矢口翔馬氏、大学院生の高橋杜人君、学部1年生の瀧本陸人君が会場設営、受付などを手伝ってくれました。

**立正大学博物館 第14回企画展「東国の埴輪と埴輪窯」記念講演会 アンケート結果**  
回答: 15名

以下の質問に当てはまる数字に○をつけてください。

**Q1** あなたの年齢を教えてください。  
 1. 10～20代 2. 30～40代 3. 50～60代 4. 70代以上

**Q2** 上の質問で、1に丸をつけた方にお伺いします。学生ですか？  
 1. 本学学生 2. 他大生 ( ) 3. その他 ( )

**Q3** どちらからお越しになりましたか？  
 1. 埼玉県内 1. 埼玉県 2. 東京都 3. 千葉県 4. 神奈川県  
 2. 埼玉県外 1. 東京都 2. 千葉県 3. 神奈川県 4. 埼玉県  
 5. 茨城県 6. 千葉県 7. その他 ( )

**Q4** この講演会は何で知りましたか？  
 1. 企画展のポスター、チラシ (カラー) 2. 博物館のホームページ 3. 講演会のチラシ (緑の紙) 4. 人に聞いて

**Q5** 講演会はわかりやすかったですか？  
 1. わかりやすく、理解できた 2. わかりやすかったが、内容はやや難しかった  
 3. わかりにくく、理解できなかった 4. 内容が難しすぎた 5. その他 ( )

**Q6** 講演会・企画展についてのご意見、ご感想をご記入ください。

- ・ 埴輪の埴輪と埴輪窯については、生も解は知っていましたが、ほかの埴輪窯を知る事ができました。これからは、埴輪に興味を持っていきたいと思えます。埴輪にもたくさんのお土産があることも知ることができ、よいお土産を聞くことができました。埴輪の先生方のお話をわかりやすく聞くことが出来ました。もっと先生方のお話を聞きたいと思いました。今日はありがとうございました。
- ・ スライドで写真等多用して下さったので、とても理解しやすかったです。
- ・ 質問をくださった皆様お礼は埴輪に役立ちます。
- ・ ありがとうございました。

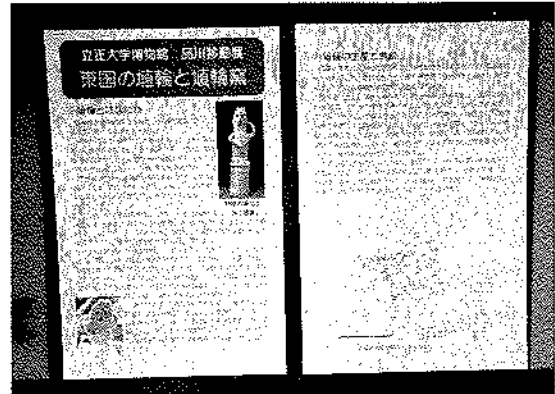
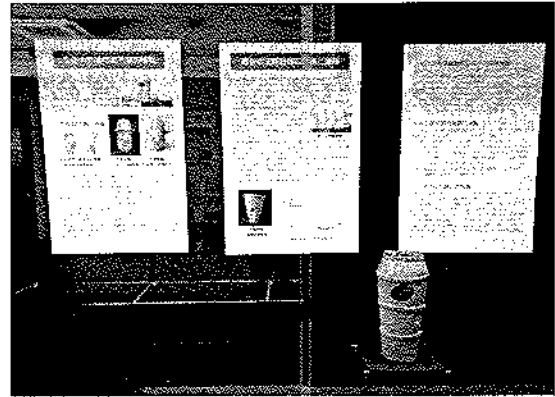
## ◆品川キャンパス展示

令和2年2月6日(木)より品川キャンパス9号館エントランスにて立正大学博物館 品川移動展「東国の埴輪と埴輪窯」を開催しています。

第14回企画展で展示した当館所蔵の伝下沼部埴輪製作址跡出土の円筒埴輪、吉田格コレクションの「ヤブ塚古墳」の形象埴輪片、出土地不明の朝顔形埴輪を展示しています。

また、パネルにより「埴輪とはなにか」、「埴輪の生産と供給」、「熊谷市江南台地の古墳と埴輪」を解説しています。

本館所蔵の埴輪が展示されることは少ないので、この機会にぜひご覧ください。



## 刊行物

令和元年10月から令和2年3月までに下記の刊行物を発行しました。

### ●第14回企画展図録

#### 「東国の埴輪と埴輪窯」

令和元年10月30日(水)から12月13日(金)に開催した企画展の図録を10月30日に刊行しました。

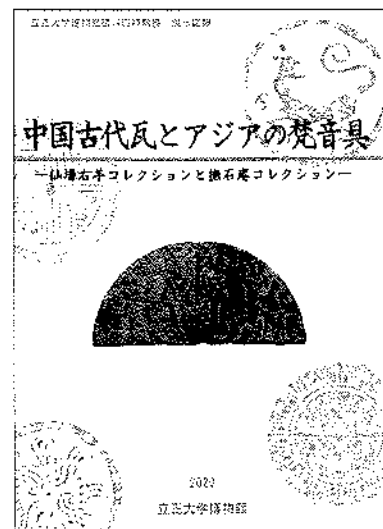


B5版、20頁、カラー

### ●第14回特別展図録

#### 「中国古代瓦とアジアの梵音具」

令和2年3月2日(月)から開催中の特別展の図録を3月2日に刊行しました。



B5版、24頁、カラー

## 土器焼き実習



11月3日（日）、4日（月）の2日間にわたり、竹花宏之先生による考古学実習・土器焼き実習が実施されました。学部4年生の実習生5人と立正大学考古学研究会の有志5人が参加しました。

実習では、およそ3ヶ月にわたって縄文土器を整形しました。実際の土器を参考にしながら、形作り、文様を施しました。

土器焼き1日目は、熊谷キャンパス南の空き地に直径2m、深さ20cmほどの穴を掘りました。また、焼成用の角材を細かく切ったり、周辺の雑木林から枝などを拾い集め、燃やしやすいく大きさに切りました。慣れない作業で最初はおっかなびっくりでしたが、土器焼きに十分な薪を準備することができました。博物館に来館中であつた、考古学研究会OB・3名が手伝ってくれました。

土器焼き2日目は、穴に薪を積み、火をつけます。十分乾燥させた土器を火の周りに並べ、乾燥・加熱します。この時、穴も乾燥・焼成します。

焚き火が十分燃え始めたら土器を火の中に並べます。火の様子を見ながら火力が落ちないように薪を投入します。最後に徐々に火力を上げ、焼成します。土器の状態を確認しながら、ゆっくりと火が落ちるのを待ちます。

焼きあがった土器を取り出し、冷まします。

今回の土器焼きでは、1個体だけ割れてしまいましたが、実習生それぞれ作品を大事に持ち帰ることができました。



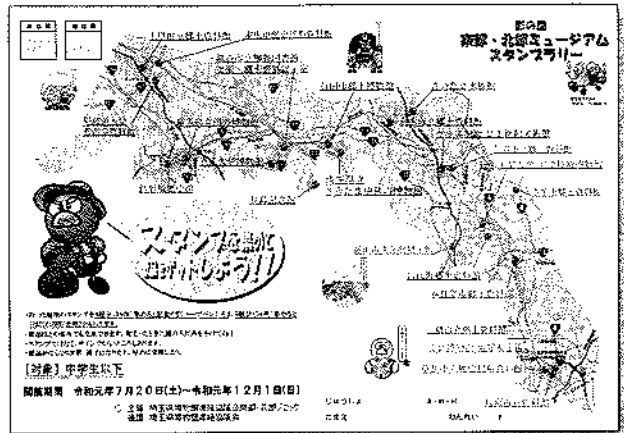


## 埼玉博連スタンプラリー

埼玉県博物館連絡協議会 東部・北部ブロックでは、彩の国ミュージアムスタンプラリーとして、全加盟館・23館において、7月20日（土）～12月1日（土）にかけてスタンプラリーを実施しました。

加盟館を見学し、5館達成すると壺輪貯金箱が、3館達成するとおみくじ付きシャープペンシルが景品として贈られます。

当館では、3館達成者5名、5館達成者1名の方に景品を差し上げました。



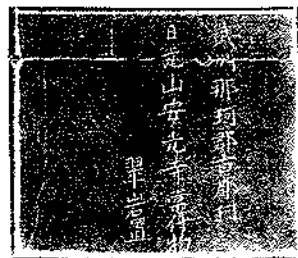
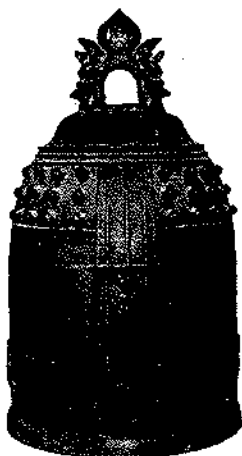
スタンプラリー台紙

### 資料活用

埼玉県埋蔵文化財調査事業団の文化財収蔵施設 エントランスで当館所蔵の「安光寺」銘の半鐘が展示されました。これは、11月14日（木）の埼玉県民の日の関連事業によるものです。

貸出資料：「安光寺」銘 半鐘（撫石庵コレクション）  
 展示期間：11月7日（木）～11月28日（木）

この半鐘には、「武州那珂郡古郡村/日光山安光寺常什物/翠岩置」という銘文があり、埼玉県ゆかりの文化財ということで、展示されました。



### 館内利用

古代の人間を考える会のみなさんが、当館所蔵の八坂前窯跡出土資料の調査を実施しました。

基礎資料の集成のため、須恵器・坏の計測、瓦の熱覧等をされました。

八坂前窯跡は、埼玉県入間市の加治丘陵にある東金子窯跡郡の一つです。昭和40年に第1次調査、昭和55年に第2次調査が行われています。

ここで生産された瓦は、承和12（845）年に再建された武蔵国分僧寺の七重塔に供給されています。須恵器も同時期に生産されたと考えられ、年代のわかる資料として大変貴重です。



**見学者の声**

- ◆ユニークな視点からまとめられてあり、興味深かった。(60代 男性・東京都)
- ◆遠隔地への供給という点を強く取上げた展示という印象を受けました。(20代 男性・山形県)

◆埴輪を身近に見ることができ、古代人の暮らしに思いを寄せることができました。  
(70代 男性・県外)

◆地域に根差して親しみのある地名の歴史など興味深く見ました。人物埴輪の顔の表情、その出土地付近に似た顔の人がいるか観察するのもおもしろいと思います。(60代 男性・高崎市)

**利用案内**

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学熊谷キャンパス内

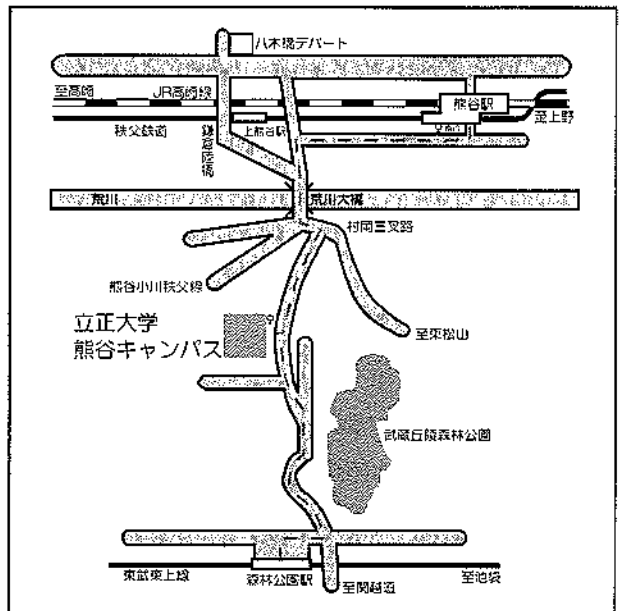
TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日：月・水・木・金曜日（大学休業中を除く）  
 開館時間：10:00～16:00（大学休業日は変更あり）  
 ※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧ください。  
 交通機関：

- ① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。  
南口より立正大学行または、森林公園駅行バス（国際十王交通）で約10分。
- ② 東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行または、熊谷駅南口行バス（国際十王交通）で約12分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課  
 (048-536-6010) にご連絡下さい。



\*今年度は、4月から9月まで学芸員1名、10月から学芸員1名、事務職員1名体制で日常業務を運営しています。そのため、開館日が少なくご来館希望の方にはご迷惑をおかけしています。来年度は学芸員1名、事務職員1名体制となります。よろしくお祈りします。

**あとがき**

第14回企画展「東国の埴輪と埴輪窯」は、300人を越える方が来館してくださいました。地域の方で初めて来館される方もいらっしゃいましたが、大学内の博物館ということで、敷居が高いと感じられていたとのこと。立正大学博物館は、地域に開かれた博物館ですので、お気軽にお越しください。

ご来館を心よりお待ちしております。

立正大学博物館館報 万吉だより 第30号

令和2(2020)年3月10日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

E-mail : museum@ris.ac.jp

URL : <http://www.ris.ac.jp/museum/index>

題字揮毫 田端観斎（立正大学名誉教授）

（印刷：アサヒコミュニケーションズ）